【レポート】よさのみらい大学（文学）～哲学のみらい～

2025年1月19日、よさのみらい大学リベラルアーツコース（文学）では、「哲学」をテーマにした哲学対話ワークショップが開催されました。

会場には温かい雰囲気が漂い、29名の参加者の皆さんは少し緊張しながらも期待に満ちた表情を浮かべていました。会場の中央には円形に並べられた椅子があり、まるで「ここで何か特別なことが始まる」と言わんばかりの空間が広がっていました。

～永井さんのご挨拶～

今回ファシリテーター役を務める、哲学者の永井さんが、柔らかな笑顔で挨拶を始めました。「改めまして、永井玲衣（ながいれい）です。今日は皆さんと一緒に哲学対話を楽しめることをとても嬉しく思っています。」その言葉に、参加者たちの緊張が少しずつほぐれていくのが感じられました。

永井さんは、哲学対話についてこう語ります。「哲学というと難しいイメージがあるかもしれませんが、実は日常の中にある『なんでだろう？』という小さな問いが哲学の始まりです。」

～自己紹介から始まる対話～

まずは自己紹介からスタート。永井さんの提案で、今日だけの「名前」を決めることになりました。本名ではなく、好きなものやその時に思い付いたものを名前にするというユニークなルールです。

参加者も、「ミュージシャンさん」「サンサンさん」「ヤモリさん」など、それぞれの個性が光る名前を発表していきます。名前の由来を聞くたびに、自然と笑顔が生まれ、場の空気が一気に和らぎました。

～問いの共有～

次に、日常で感じている「問い」を共有する「問い出し」時間が設けられました。

「なんで独り言を言うのか？」「何を持って大人って言うんだろう？」「自分の時間ってなんだろう？」など、さまざまな問いが飛び出します。どの問いも、普段は深く考えないけれど、確かに気になるものばかりです。

休憩時間に、みんなで出した「問い」の中から話し合うテーマを投票で決めることになりました。結果、「何を持って、趣味って言うんだろう？」という問いが選ばれました。この問いに対して、どんな対話が生まれるのか、期待が高まります。

～ゆっくりと進む対話～

対話が始まると、最初は少し緊張した空気が漂っていました。しかし、永井さんが「無理に話さなくても大丈夫です。沈黙も大切な時間です」と優しく声をかけると、場の空気が少しずつ温まっていきました。

「趣味って、自分が楽しいと思うことをする時間だと思います。」

「でも、趣味が仕事になると、楽しいだけじゃなくなることもありますよね。」

「確かに。じゃあ、趣味と仕事の違いって何なんでしょう？」

こんな風に、一つの問いから次々と新しい問いが生まれていきます。話す人は、永井さんが用意した「鳥のぬいぐるみ」を手に持ちながら発言します。鳥のぬいぐるみを持っている人だけがじっくり時間を気にせずに話すことができるこのルールのおかげで、誰もが安心して自分の考えを話すことができました。

発言が終わると、他の参加者が静かに頷いたり、「それ、わかる！」と共感の声を上げたりします。時には笑いが起こる場面もあり、まるで友人同士がリビングで語り合っているような、心地よい空間が広がっていました。

～対話の終わり～

時間が来ると、永井さんが「結論やまとめは必要ありません。この対話をきっかけに、それぞれが問いについて考え続けていただければと思います」と締めくくりました。その言葉に、参加者全員が静かに頷きます。

哲学対話は大盛況のうちに終了。会場を後にする参加者たちの表情は、どこか晴れやかで、何か新しい視点を得たような輝きがありました。

～参加して感じたこと（運営事務局スタッフ）～

今回の哲学対話を通じて感じたのは、「問いを共有することの楽しさ」と「ゆっくりと語り合う時間の贅沢さ」です。普段の生活では、答えを急ぐことが多いですが、この場では答えを出すことよりも、問いを深めることが大切にされていました。そのプロセスが、なんとも心地よく、豊かな時間でした。

日常の中で、ふとした疑問を大切にすること。それを誰かと共有し、語り合うこと。そんな小さな営みが、私たちの生活を少しだけ豊かにしてくれるのかもしれない。そして、日常の中で生まれる小さな「なんでだろう？」を大切にしていきたいと感じました。